

発表者 谷島 昭

テーマ 「学校・家庭・地域の連携による教育について」

よろしくお願いします。3月まで勤務していた学校問題解決サポートセンターへの相談は増加が止まりません。大半が学校・教職員への苦情です。保護者や地域とのトラブル、いわゆる「学校問題」は、小・中学校が圧倒的に多い。発生率は15年間で2.4倍、5校に1校。施策は現実へのアセスメントが命です。このままでは、学校・家庭・地域が連携した教育は広がりにくい。信頼と絆をどう強めるか、その鍵の1つが祭りにあると私は考えます。

その成功事例を、唐突ですが、インドネシアのバリ島に見ることができます。バリの村々では年間100日も祭りを行い、「神と祭りの島」とも呼ばれています。調べてみると、バリの人々の生存戦略が見えてきます。バリ島は至るところが傾斜地です。そこに美しい棚田をつくって、水田農耕を生業としています。我田引水による水争いがいつ起きてもおかしくありません。そのため、傾斜地を生かして水路が整備され、同じ水路を使う人々が水利組合「スバック」をつくっています。調べたところ、1つの村の人々が複数の水利組合にあえて所属しています。

村人は同時に「祭り仲間」です。水利組合の間で水争いが起こると、祭りができない。だからけんかはできない。祭りの力で対立を避け、結束を強める。これがバリの人々の生存戦略です。映像は、バリ島の「ケチャ」です。声による16ビートに注目してお聴きください。この「ケチャ」の合唱を楽譜にしてみました。白い丸は「チャ」と読み、4つの異なるリズムで構成されています。一見ランダムに見えますが、縦に足すと2個1個、2個1個…、大きな音のチャと小さなチャが交互にきて、16ビートが刻まれます。指揮者はいません。なのに200人、300人もの人の息がピッタリ合って1つになる。なぜ可能か。「阿吽の呼吸」、「以心伝心」。それを司る人間の脳がもつ「絆の脳機能」のなせるわざです。合えば合うほど気持ちよく、やればやるほど人々がつながる。ちなみに「ケチャ」は、スマホやゲーム依存症対策でも注目をされています。

日本の祭りの例です。愛媛県大西町に伝わるこの祭りは一度廃れました。しかし、新しい住民が増え、軋轢が生まれる中で復活されました。獅子頭の重さは20キロ。1人では1分ももちません。十数名が巧みに入れ替わってつながります。もう1つの写真の、人間が4段重ねになるこの芸能の一番上に乗っているのは子どもです。信頼があるから子どもを託せます。

次に新しい祭りの例です。東中野に拠点を置くアマチュアの芸能山城組は1976年、「ケチャまつり」を新宿の超高層ビルの一 corner で始めました。準備も演じるのも自分たち。地球文化の多様性をうたい、2万人が集うこの祭

りは2021年、『ウォーカープラス』で東京の祭りの第1位を獲得しました。新しい祭りをつくり、根づくのに50年とかからない。私もこの祭りに1回目から参加しています。ケチャも同じで、誕生したのは1933年、わずか90年前です。中野区にできないはずはありません。ちなみにスライドに映る黄色い衣装の「バナナのたたき売り」は私です。

ではどうするか、盆踊りを例に考えてみました。先生方の負担や効率に配慮し、各学校が「総合的な学習の時間」などを使い、共通と独自の演出で参画する。区を挙げて、表彰などで応援する。先生たちも「踊らにゃそんそん」です。保護者、地域は盛り上がり、参加者が増えます。そしてギネス達成のその先が見えてきます。中野区民は皆が「祭り仲間」、学校・家庭・地域の連携による教育の土台ができます。急がば回れです。

その土台の上に、高校改革や教育行政などを担ってきた経験から、特に力を入れたい課題は、勉強の仕方を知らないまま高校に入学してくる生徒が実に多いことです。連携して寺子屋方式で手ほどきし、学力向上につなげる。また日本語の文章を書く指導。これにより、学力調査で課題になっている思考力、表現力が格段に伸びます。地域を学ぶ「中野学」、知的好奇心セミナー、豊かな心の育成…。合言葉は「最も尊いもの＝地球」、そして「利他の心」だと思います。他にも、読み聞かせ、キャリア教育、異文化交流などいろいろあります。こうした事業も大切ですが、基本は「いつでも、どこでも、誰もが見守り、声をかける」こと。

部活動の運営の仕方は、それぞれのよさがあります。学校と地域移行の併存ではどうでしょうか。子育ては実に難しく、悩みます。「親学」を世代を超えて学び合う。そのターミナルに学校になる。

そして、「学校問題」のトラブルへの対応です。泥沼化して子どもが犠牲になる前に、地域学校運営協議会により解決を図る。このことは検討する価値があると思います。

連携を生かしてやりたいことは山ほどあります。大事なものは、つながる喜びを体感し、人間関係を調整・構築する力を、子どもたちにも、大人たちにも育むこと。「絆の中野区」、その上に学校・家庭・地域ぐるみの教育を創造する。地球社会に分断といさかいが広がる今だからこそ、子どもたちの未来のために、これが重要だと思います。

ご清聴ありがとうございました。

区長      ちょっと圧倒されましたけれども、小・中学校に苦情が多いところから始まりましたけれども、その苦情を、多いというのは、保護者と学校との信頼関係が、今はないから。

谷 島 難しいのだと思いますね。保護者の価値観が、昔よりも急速に多様化しています。その一方、先生たちの人間関係を構築する力、これをはっきり言うと衰えてきていると思います。ですから、その両者がかち合ったときに、保護者との円滑な関係をなかなかつくれない。そういう状況の中で、ちょっとした言葉遣いの違い、食い違い、行き違いというのですかね。そういうところから亀裂が入って、トラブルに発展する例は多いです。

区 長 それを解決するためにケチャみたいなのが。

谷 島 それは1つの方法ですよ。祭りという1つのコンセプトはどうかなと考えます。

区 長 例えば、中野でそういう祭りを始めたり、祭りを、既存のものを利用するという具体的なイメージってありますか。

谷 島 私、決してケチャ祭りを中野でやれと。

区 長 分かっています。

谷 島 そういう思いも若干、実はあります。でもいろんな祭りを新しくつくっていくときに活かせる演出工学という考え方があります。どういうふうな色彩、どういうふうな照明、どういうふうな衣装、どういうふうな音楽・リズムが効果的か。そういうものをうまく使って、それをもとにして新しい祭りつくり活かす。私はむしろ既存の祭りにそれを上乘せしてはどうかと考えます。先ほどのケチャも、実は伝統的な「サンギャン」という習俗に、新しい演出を加えて誕生しました。これ、ドイツ人の画家のヴァルター・シュピースという、バリ島に住んで、バリ島をこよなく愛した外国人なのですけれども、彼が提案して村人が賛同してできて、全村に広がっていった。村それぞれの演出があります。テレビが普及してスローモーションの映像が流れると、スバリ、スグリワという2匹のサルの兄弟のけんかにスローモーションのシーンを取り入れたりする。また、スーパーマンがはやると、アノマンというサルの勇者がいるのですけれども、これをみんなで担いで空を飛ばしたりとか。ですから、伝統的な祝祭を、今、バリ島はつくっている。以前、岩手県で当時の増田寛也知事がバリ島

と文化交流協定を結んだことがあります。これはバリのノウハウを積極的に学んで、岩手県の産業、それから地域おこしに活用していこう。そうした素材はたくさんあると思います。ですから、そういうものに依存して、参考にしながらつくっていきたいなと思いますね。